レプチャ族における神話と儀礼のコスモロジー
——ケサルとカンチェンジュンガのフォークロアをめぐって——

鈴　木　道　子

Cosmology & Mythology in Ceremonies of the Lepchas
—— Focused on the Folklore of King Kesar and Mt. Kangchenjunga ——

Michiko Suzuki

Summary

One of the most important ceremonies that the *bongthing*, a kind of shaman of the Lepchas, performes is that of Mt. Kangchenjunga, an abode of the protector of Sikkim as well as of the Lepchas. On the other side of the Kangchenjunga is the legendary land called Mayel inhabited by the immortals who are patrons of crops and fertility and guarded by three demonic brothers, one a guardian of hunters and the other two guardians of Himalayan animals. *Bongthing* is mythologically said to be the inhabitant of the Tiamtan, an intermediate place between the deities' Rum land and the earth. In the Sikkimese version, Tiamtan is the site where the King Kesar, a legendary hero of Tibetan origin, resided for a while before his incarnation as a savior on the earth.

With the tide of modernization of Sikkim, the legendary hero Kesar has become a war god, while the Kangchenjunga is celebrated with national festivity. These cosmological ideas and their changes are discussed here through the analysis of supplementary data obtained in the field research in Sikkim in 1984 and 1986. Received Dec. 22, 1987

Key Words : The Lepchas, Kesar, Kangchenjunga, Folklore, Storytelling, *Bongthing*, Mun, Hunting-complex, Agricultural fertility complex, Objectification, Miniature garden-like setting of ceremony, Vertical & horizontal idea.

1．は　じ　め　に

1．レプチャ族とレプチャ語

昭和59年度文部省科学研究費補助金による海外学術調査「ネパール・シッキム民族音楽学術調査」（研究代表者＝藤井知昭国立民族学博物館教授），並びに昭和61年度の同学術調査「インド東北部・ブータン民族音楽学術調査」（同代表）に，研究分担者として参加した筆者は，シッキムにおいては２年度

にわたって研究調査することができた。

シッキムは，ネパール・ブータン両王国にはさまれた王国であったが，1975年にインドの一州となった。住民は主として，先住民とされるレプチャ，北から移住してたチベット人(ブーティア)，および西から移住してきたネパール人であり，中根千枝氏の調査報告によるところの「複合社会」[中根：1958] である。本稿は，このシッキムの総人口の12パーセントを占めるにすぎないといわれているレプチャ族の，フォークロアにおける神観念もしくは宇宙観・コスモロジーを，口頭伝承と儀礼や祭事の両側面から扱おうとするものである。

レプチャは，『文化人類学事典』(弘文堂・1986) によれば，「ロン（ロン谷の人）ともいう。(筆者，注1)シッキムからネパール東部に分布するチベット・ビルマ語系の民族。人口は約3万人弱で，シッキムに1万6000人，ダージリンに1万人，ネパール東部に3000人が分布している。」また，文字に関しては同所に，「独自のレプチャ文字をもつ。この文字はチベット文字無頭体を基本にして18世紀前半に成立した（長野泰彦)」とある。

レプチャ語は，かつて，*Dictionary of the Lepcha Language* の原著者であるメインワリング G. G. Mainwaring によって，「もっとも含蓄に富む美しいことば」「もっとも古い言語」「エデンの園で語られた言語」という評価を受けたようだ [Gorer 1984 : 39—40]。二重母音や三重母音といった複雑な母音構造や，抑揚によって一つのことばの意味が幾つにも変るということなどから，レプチャの話しことば (speech) は極めて soft であり tonic であるという見方もされる [Waddell 1899 : 44]。それゆえに，レプチャ語の音写はとりわけ困難であり，メイワリングがローマナイズした発音が，ワデルの聞いたのと甚だしい違いをみせたことに対しても，ワデル自身が弁明している[ibid.]。しかし，この音の表記に法則が見つけられなかったことが禍して，メインワリングの死後，彼の原稿を編集して，「レプチャ語—英語辞典」を完成し出版したドイツのチベット学者グリュンヴェデル A. Grunwedel は，メインワリングの残したレプチャ語の表記すらもその辞書から削ってしまった。当時の帝国政府関係者は，レプチャ語の綴り字をまったくのでっちあげの産物とみなし，レプチャ文字の活字の製作費用を惜しんだのである [Gorer 1984 : 41]。

ところが，実際には，その辞典 *Dictionary of the Lepcha Language* がベルリンで出版された1898年を遡ること約二世紀も前に，レプチャ文字は考案され，それを用いた様々な書物が既に出されていた[(2)]。18世紀の初めかもしくは17世紀の末，ラマ僧でもあったシッキム王チャドル・ナムギャル（在位1700—1716）が，チベット大乗仏教（ラマ教）を広めるための一手段としてレプチャ文字を創りだしたとされている。1937年にシッキムでフィールドワークを行なったゴレルが耳にした，レプチャ語の現存する写本は全て，チベット語からの翻訳であったようだ。レプチャ語による神話や説話の編纂も成されたようである。バプティスト派の宣教師たちは，新約聖書の三巻からなるレプチャ語訳を印刷した。しかし，こうしたいくつかの注目すべき動きにもかかわらず，レプチャ語を読める者は極く稀であり，レプチャ語は全く使用されなくなっていた，とゴレルは述べている [ibid. : 38—9]。不完全ながら，メインワリングによる文法書まで出版されたが，この語が，地方の学校で教えられることもなかったようである [Stocks 1975 : 7]。

2．語り好きなレプチャ族

このように，文字はあっても無文字社会に近い状態は，当然，記憶力の良さにつながることは想像に難くない。モリスもゴレルも一様に，彼等の記憶力の確かさに言及している［Morris 1938：25］［Gorer 1984：41(3)］。二人は一緒に，1937年シッキム東南部のリンテム村で調査を行なった。そこでは12年前の1925年に，ストックがフォークロアの収集を3日間行っていた。その時に集められ，印刷出版された物語と同じ物語に彼等も出合ったのであるが，ストックのものと比較するとき，「それら（ストックの話）の多くが，恐らくは通訳者が上品ぶった結果だろうが，削除訂正をこうむってはいるものの，特に劇的に興味深いところでもないのに，言葉一つひとつが似かよったものであることには驚嘆した」ようである［ibid.］。

レプチャの人々は，記憶力が良いのに加えて，無類の話好き，物語好きであるらしく，このことに関して，ゴレルが大変興味深い報告をしている。少し長くなるが，順を追ってその概要を述べてみたい。

ストーリー・テリングは，レプチャの主要な気晴らしである。夜，仕事が終った後，火を囲んで一人が語り，他は聞き役になる。こうした時は，長い話が選ばれ，5・6晩連続することがある。草取りのような長くて退屈な仕事の最中にも，一人が短い話を語って聞かせることもある。祭の時のように，じっと長い間人々の関心を引きつけておくことが困難な場合には，短い話が選ばれる。珍しい鳥や虫が引金となって，それらに纏わる話を，時を構わずに語りだす者もいる。

レプチャの話は極めて具体的である。人でも物でもそこに実在しているのかいないのかを，曖昧にしておくことがなく，また，推測で補うということもしない。ところが，ドラマチックに語るということはなく，物真似や声色は，滑稽話のときに現れるに過ぎない。

殆どの老人が長い話を一つや二つは知っていて，それがいわば彼等の"おはこ"となっている。しかし，そこに所有の観念は伴わず，他の者がそれを覚えて語ることは自由である。長い話を覚えてそれをもう一度話せるようになるには，一生懸命に三度聞く必要があると考えられている。動物に関しての2・3の寓話を除いては，物語は決して子供には聞かせない。分別ができ，静かに座っていることができるようになって，つまり十歳ぐらいになって初めて，話の邪魔をしないという条件で聞くことが許される。子供でも短い話を一・二知っている者がいて，嬉しそうに私達に語って聞かせた。未婚の若者には，聴衆が中々集まらないからである。寓話を新たに創作することは，それが半ば聖典的性格をもっているため，許されないことと考えられている。せいぜい，個人的に装飾を加えたり強調を置くことしか認められない。物語が意図的に創られたことがあるかどうか尋ねたところ，来訪者や余所者が話を持ち込むことによって，レパートリーが増加することはあると答えた。

レプチャの人々は，自分達の過去や隣人達の出来事，逸話等も好きである。この場合，彼等はまるで目前の出来事のように，具体的かつ詳細に語る。しばしば小枝や小石を用いて，登場人物や物を明示してゆく。

ストーリー・テリング（物語をすること）に価値を置くということは，恐らく，レプチャ族のモノ

ログ（独白形式）偏重の性格と関わってこよう。この傾向は，登場人物が喋るときでさえも顕著に現われる。せりふの掛合いがあるのは，滑稽譚のときだけだ [Gorer 1984 : 266—7]。従って，レプチャの人々が語るときは，話のひとまとまりを単位として揺れるようなリズムで語り，途中で中断されることを嫌うのである [ibid. 31]。

2．レプチャ族の英雄物語

1．レプチャ族のフォークロア

レプチャ族の，この語り好きの性質が背景にあったればこそ，彼等のフォークロアを実際の語り手から採集した C. De Beauvoir Stocks 女史による，"Folklore and Customs of the Lepchas of Sikhim" Journal and Proceeding of the Asiatic Society of Bengal（New Series）vol. XXI, 1925, No. 4 [Stocks 1975] の成立が可能であったと言っても過言ではなかろう。

その中に，（A）創世神話として，7人の語り手から7種類（神々の系譜，雲の魔神の誕生と死，人類の始まり，レプチャ族の始祖，洪水神話と一種の「バベルの塔」伝説等）の話，（B）動物神話として，16人の語り手からそれぞれ違った話，（C）英雄物語として5人の語り手による5種類の話，（D）その他として，馬鹿物語，嘘つき物語，女妖術師の話等，10編を伝えている。全部の話の長さを延べにして比較すると，（A）が14%，（B）が23%，（C）が42%，（D）が21%となる。通訳を通して採集され英訳された資料に基づくこの比率が，そのままレプチャの人々のそれらの物語に対する態度の軽重を表しているとは言えない。しかし，ある程度の示唆は与えていると考えることができよう。

ストックは，「物語に表されたロンの人々の神話と宗教」と題する解説の中で，レプチャ人のメンタリティーを示す際立った特徴として，次の二つをあげている。すなわち，動植物や虫などに人間に対する以上の関心を払うアニミスティックな，よりプリミティヴな文化の特徴と，主として英雄や邪神等を扱おうとする，より進化した文化の特徴である [Stocks 1975 : 9—10]。しかし同所で，また，純粋にレプチャ固有の信仰に基づく神話と，「借用したそれ」とを区別することは困難である，とも言っている。

確かにシッキムは複合社会であり，その中でも，少数民族となってしまったレプチャ族が，チベット人（ブーティア）やネパール人と混ざりあっていることは，既に述べた通りである。キリスト教化の進む中で，ラマ僧までが，創世紀の「アダムとイヴ」に類する話を事細かに語ったということも [ibid. 9]，物語好きのレプチャ人に関して言えば，驚くに足らないことかもしれない。17世紀後半，主としてチベットからの移住者によって，シッキムという国が形をなし，先住民であるレプチャ族の間にチベット仏教（ラマ教）が浸透し始めて以来，レプチャの人々はさまざまな宗教と神々に接してきたのである。

しかし，何をもってレプチャ固有の伝承，本来の姿とするかについては異論があろう。恐らく他の民族の場合にも同じことが言えるであろうが，「固有性」は，外からのあらゆる影響を剝ぎとった後に残るものではなく（「残る」と考えるのは，幻想であろう），「固有性」は，外からの影響の受け入れ方にあると思われる。

従って，ゴレルやモリスが，ストックの見解とは逆に，レプチャの宗教は本来のアニミズムではないと言っていることも(詳細は後述)，チベット仏教以前の形態といわれるボン教的性格がどれほどみられるかという議論も，レプチャ族の物語伝承を考察する上においては，さして重要な意味をもたないと考えられる。むしろ，明らかに外来のテーマと思われる話が，レプチャの世界ではどのように語られているかという具体的な表現内容の比較が，レプチャの民族性の核心に触れる近道となろう。

2．レプチャのケサル伝承

例えば，ストックが収集した英雄物語の一つに，「どのようにしてリン・ギャソは，全ての悪魔達を降伏させたか」という話があるが，これは明らかにチベット伝来の話である。リン gLilg はチベット東部アムド地方にあったとされる王国名で，ギャソ Gyaso は，その地方出身の伝説的英雄ケサル Kesar / Gesar の名が訛ったものであろう。

ケサル英雄伝説は，恐らく一人の英雄の名を冠したものとしては，「ラーマーヤナ」や「オデュッセイヤ」に並ぶ，あるいはそれ以上に壮大で，且つ広汎な伝播領域を誇る叙事詩である。10世紀から15世紀頃にチベットで成立したとされ，西はカラコルムの麓のフンザ（パキスタン）から，北インド，中央アジア，モンゴルに至るまで，チベット仏教文化の影響の及んだ地域全域で伝承され愛好されてきた。愛好されてきたというよりも，正確には，信仰されてきた，というべきかもしれない。現在もなお，こうした地域の多くでは，叙事詩とは別に，ケサルは神格化され，邪教等を調伏する仏法の権現の一つとされている。これも，「ラーマーヤナ」のラーマが受けている待遇に共通するものである。

筆者は，昭和55年度の文部省科学研究費による「パキスタン北部・インド西北部民族音楽学術調査」の報告書の中で，「フンザの口承文芸」と題して，その一部でケサル伝承の比較研究を行なったことがある[鈴木　1982]。また，近年漸く，君島氏や金子氏らの翻訳や解説によって，日本でもケサルが一般にしかも学術的に紹介されるようになった［君島　1987］［金子　1987］。従って，詳細はそれらの書を参照されたい。

ストックが伝える英雄リン・ギャソの物語は次のようなものである。天上界の神々であるルムの王と后には7人の息子がいた。人間の住む下界が邪鬼によって荒廃させられているのを見て，それを救うために，末子のギャソを地上に転生させることになる。地上では，ある女がギャソの変化である霰を食べて妊み，子供を産むが，子供でなくてそれが皮袋だったため道に捨てた。天の母が鉤を使って子供のギャソを袋から出して，女に育てさせる。その子供は人食鬼を殺して王様となり，女の邪鬼の国を征伐する。留守中にギャソの妻を敵のホル王に売った叔父を倒し，妻も取りもどしてめでたしめでたしとなる［Stocks　1975：107—115］。

実は，ストックが報告している5種類の英雄物語の中で，このリン・ギャソの話と非常に形態のよく似た物語がもう一つある。「アティアジャク Ati-azyak の冒険」と題されたもので，次のような内容である。シッキムの王が邪鬼に悩まされ，神々の世界ルムに英雄の派遣を願う。ルムの父母は3人の兄弟の末子を下す。シッキム王妃は霰を食べて懐妊するが，皮袋を産み落したため道に埋めた。王がそれを掘り起こし，中から男児を発見。アティアジャクと命名された彼は，海蛇を降伏させ，7人

別 表

	出 典	口述者・時・場所	Hero の天上界における父母
A	Stocks, C. De Beauvoir, *Sikkim-Custom and Folklore* (Reprint), India, 1975 (1927). "XXVIII How King Ling Gyaso Subdued All the Devils."	"A giggling gesticulating woman" 1925年3月10日, Sikkim の Chhibo	父＝Rum 王, Gyabu Punu 母＝Rum 王妃, Thih Kiong Hero＝Ling Gyaso （7人王子の末子）
B	Stocks, C. De Beauvoir, op. cit., "XXVI The Adventures of Ati-Azyak"	Chyupan 1923年5月16日, Sikkim の Sindhik	父＝Rum-father（Rumは神々のこと） 母＝Rum-mother Hero＝3人兄弟の末子（乳呑子）
C	Lorimer, D. L. R., "The Adventure of Kiser" *The Burshaski Language, Vol II, Text & Translation, Oslo*, 1935(1931).	Ali Madad（老人） 1923年, Hunza の Baltit村	
D	Francke, A. H., "A Lower Ladakhi version of Kesar Saga" *Bibliotheca Indica*, new series, No 1134 (Calcutta,1905), No 1150 (1906), No 1164 (1907), No 1218 (1909).	dKon mchog bKrashis rgya mthsopa (Tagmacig の近くの Lerdo で育った Khalatse の住人。筆記者は Khalatse の教師) 1900年, Khalatse村	父＝dBangpo rgyabzhin 母＝？ Hero＝Don grub dkarpo （3人兄弟の末子）
E	David-Neel, A. & Yongden, *The Superhuman Life of Ling*, New York, 1978 (Reprint of the 1934, the English tranlation of the 1931 of Paris).	The lama, Yongden 1930年以前？, Kham-東南チベット地方—の Jakyendo （いくつかの Version を参照の上, 著者がまとめた。）	父＝Korle Demchog（神の1人） 母＝Dorje phagmo（神の1人） Hero＝Thubpa Gawa （命令者は Padma Sambhava mo（占い）により Thubpa を選ぶ。）
F	Zeitlin, lda, *Gessar-Khan : The Legend of Tibet*, India, 1978（1927).	主として I. J. Schmidt によるモンゴールの話(1936), 参考として, B. Bergmann のカルムイク語の話（1804）を資料に用い, 著者が編集したとされる。	父＝神々のたる Kormuzda 母＝？ Hero＝Tagus（3人兄弟の末子） 天上界は Sumeru の上にあり世界の智者として Buddha が存在する

	Hero の出生状況と幼名	幼年時の特徴	兄弟姉妹
A	○母は大きな霰を食べて懐妊。 ○袋を生み落し, 道に捨てる。 ○Rum の母が鉤を天より垂らして, 袋の中から子供を取り出し, 母親に与える。 ○人手に渡したら殺すと言われ, 母は子供を12階の自分の部屋に入れる。	○毎日子供を食べる, Afool という怪物兄弟を倒す。 ○王になり宮殿に移る。 ○Ling-gyaso-gya-bo と名乗りをあげる。	
B	○母が布を織っている時, 降ってきた霰を食べて懐妊。 ○皮袋が生じたため, 道の十字路に埋める。 ○王はそれを掘り起し, 皮袋より銅の壺を発見, 中から男子誕生。 ○Ati-azyak pono と命名される。	○可愛いい少年が, たちまち成長。 ○6人の兄たちに Lung-da 王の7人王女をもらって来るよう命じる。	○6人の兄（黒・緑・赤・白の海に押し迫られた時, 命乞いの代償に弟を裏切る）。
C	○妻がアイベックスの肉を食べて生まれた男子を, 夫が他人との約束で手渡したが, その子が雨の一滴となって蘇り, それを飲んで, 嫁にあたるキセルの母が懐妊する。 ○双子の兄として生れる。 兄＝Pāngchu（後の Kiser), 弟＝Būmliftan	○容姿は醜悪だが賢く, 奇蹟を示す。 ○噂を聞いて, 7人の王女が彼を召す。 ○トリックを使い, 長女の王女の婿となる。	○Hero と双子の弟 Būmliftan は身体が鉄で, 腋下のみ肉(弱点)。 ○双子が生れる前に生れていた, ロバの頭や犬の頭の異母兄100人。 （長男は Aba Dumbu）
D	○母が布を織っている時, 降ってきた大きな霰を食べて懐妊。 ○種々のものを誕生させた後, トカゲ状のものが生れる。 ○それが Kesar の姿をした子供となる。	○悪鬼に狙われても, 奇蹟を示し助かる。 ○乞食少年となって, aBrugumaに接近。 ○トリックを使い, その婿となる。	
E	○天から下った夫のもたらした秘薬により懐妊。 ○兄弟姉妹が生れた後, 母の頭から白い卵の形で生れる。 ○卵は割れて, 3つ目の子供が誕生, 真中の目は母親が取り去って隠す。	○種々の奇蹟を示す。 ○王妃の伯父の Todong により, 母と共に荒野に追放される。 ○婿選びの競技に, 下女の息子として出場, 勝利を得る。	○同時に誕生した者＝肩や心臓からは美しい少女, 臍からは, 皮袋に入った赤・青・黒の3人の男子 （後に, ケサルと共に, ホル王退治に行く）。
F	○天の啓示で, 母親に誕生が知らされる。 ○母の腋下より生れる。 ○Yoro と命名される。	○姿は醜悪。 ○種々の奇蹟示す。 ○婿選びの試練に挑戦, 勝利を得る。	○同時に誕生した3人の娘は, 象に乗って消える。 ○兄として Rongsa と Shikeer。後者は, hero の援助者となる。

地上での Hero の父母と彼等の生れ	地上での誕生に際し，与えられたもの，又はHeroが要求したもの
○Hero の父＝？ ○Hero の母＝Ling-lyang で，布を織る処女，Imo-yout-mo-pandi	金の弓矢，金の馬，金の帽子 金の犬，金の山羊，金の雄鶏
○Hero の父＝Lyang-bar（宇宙の中心 Sikkim）の国王： 国を訪れる人が皆，翌日に殺されてしまうので，対策を聖者に相談して，救世の英雄を求る。 ○Hero の母＝王妃　Tang Kung ramit.	剣，隠れ帽子，金の帽子，片目の牛，片目の雌馬，雌鶏，山羊
○Kiser の父＝Dnugpa Miru（ある金持のラマの蔵の小麦の中から現れた子供）。 ○Kiser の母＝Abe Dumbu の嫁（Dungpa Miru の長男である，ロバの頭をした男の妻）。	
Kesar の誕生を天神に要請する Agu dPalle rgodpo の出生： dKrashisshis という父祖の納屋の麦が変じてイモ虫となり，それが極めて虚弱な幼児となって18人の娘と結婚。山羊頭やトカゲ頭の子が生れ，その内鍛冶屋の娘から，Agu dPalle rgodpo が生れる。人には愚か者と言われる。 ○Kesar の父＝Agu Pasung ldan ra skyes. ○Kesar の母＝Gog bzang lhamo（gLing 国の父祖の 3 人娘の末娘）	妻，馬，兄弟，守護神 弓，矢，道具類，石切り，鋤，鍋，薬かん 山羊，引き牛
○Gesar の父＝As Kenzo（天から下った父） ○Gesar の母＝Dzeden or Gongmo（Naga 族の nāgī）： Padma Sambhava が Thubpa Gawa の要請に従って，Naga の国から連れ出す。 Gongmo と命名され，王妃 Gyasa の下女となり，王の寵愛を受けたため，王妃により追放され，流浪の生活が始まる。	妻，馬，馬具各種，剣，弓，矢 仲間の英雄 2 人，戦略家の伯父，守護神の神々，妖精
○Hero の父＝Sanglun（Chotong と共に Tibet の 2 王子の 1 人。元，Tussa 族の首長）Chotong の誘いで Bayan に攻め入り，彼にだまされて，Bayan の娘 Amurtsheela のみを戦利品として得る。 ○Hero の母＝Amurtsheela	

Hero と共にもたらされたもの（文化英雄の要素）	第 1 妻の名，夫としての Hero の試練
	妻＝Pamu-chi-chong-mu ○夫としての試練が次の本題の冒険。
○Hero の誕生と同時に，天上から連れて来た，片目の牛・馬・鳥類も蘇る。	妻＝Eu-ramit（Lung-da王の 7 人王女の末娘）→後に巨人の腹から生じた男子の妻として与えられる。 他 3 人＝Zer-y-ong. Komyong, Paril-bu。 ○夫としての試練が次の本題の冒険。
	妻＝Langa Brūmo（7 人の王女の長女） ○霊獣（牛）の Brūngkapurdōnō 狩り。 （冒険の狩りの途中の姿を垣間見た妻の目に，馬上の騎士，Kiser がうつる。）
○Agu dPall は Pachi dpal dong の城を見つけ，財宝である，最初の犬，家蓄等を，gLing の国へもたらす。 ○Hero の生れる前に，太陽と月，種々の動物，家蓄，魚，鳥が生れて，各々の栖へ就く。	妻＝'aBruguma ○野生のヤク Riri を退治，その皮を gLing の国中に広げる。 ○怪鳥の Nyima Khyung rung の羽根を持って来る。 （これらの試練のあとで Kesar の真の姿が現われる。）
○Hero は馬と牛の品種改良を行う。 ○中国から絹をもたらす。 ○Tongots から金をもたらす。 ○長じて冒険の後，6 万種の薬（薬草？）をもたらす。	妻＝Sechang Dugmo （夫として，というよりは，今後の冒険の準備としての試練。） ○水晶の山をくだき，生命の泉，生命の丸薬，武器等を入手。
○Yoro は，羊，山羊，牛などを生じさせる。	妻＝Rogmo（Tibet の隣国の Sengeslu Khan の娘） ○馬の早乗り。 ○凶悪どう猛なイノシシ退治。 （これらの試練の後，天啓が下り，Yoro は Gessar となる。）

	第 1 の 冒 険	第 2 の 冒 険
A	○女の邪鬼の国へ行き，蠟で作った僧院を建てさせ，火をつけて，彼等を全滅さす。 ○人食鬼の家へ行き，その女房を味方につけて鬼を殺害。	○留守中に，妻を Hore 王の元へ売った伯父を殺害。 ○Hore 国へ行き，幼児に変身，鍛冶職人の跡継ぎとなる。 機会をねらって Hore 国大臣と一騎打ち，彼の腋下の隙間に矢を射って殺す。
B	○海蛇との対決→Zer-y-ong と Konyong-pandi という2人の姫をさらって来るよう命じられる。 ○海蛇の妻の助けで，7人の鬼の国まで到着。鬼の妹を味方とする。	○7人の鬼との技比べ－隠れんぼ，化け比べ，闘鶏，軍隊の対決等→勝利。鬼の妹姫である Zey-y-ong と Konyong-pandi を救出。 ○海蛇を退治→鬼の姉妹を自分の妻とする。
C	○Haicaiyūl 国の乗っ取り。 4人のタム（貴族）を追放し，自ら王位に就く（12年間）。 Būbuli Gas を妃として Alti に住む。	○Kiser の留守中，Langa Brūmo をさらった Horyūl 王への復讐—Kiser は醜い姿で Horyul 国に入り，鍛冶屋に認められてその娘と結婚。種々の奇蹟を見せてHor 王を倒す。 （エピソード：Hor 軍との戦いにおける，長兄 Aba Dumbu の活躍。Langa Brūmo の密告で，腋下を射られて負傷する Būmliftan の話。）
D	（白・黒・赤の隠れ屋で3年過した後） ○中国へ遠征。 谷や丘を入れる籠，砂漠入れる袋，川の水を入れる瓶，等の力を借りて中国へ到着。妖術を駆使し，中国王女を妻に迎え，中国の財宝と共に gLing 国へ帰る。	○北の国の巨人との戦い—巨人の家は，東（白）南（青）西（黒）北（黄）の門に守られている。巨人の妻を味方につけ，巨人を殺害。彼女により，忘却の薬を飲まされる。 （北へ出発する際，「去るもの」「去られるもの」「残される子供」の歌が妻との間で交される。）
E	○北の国の王 Lutzen を倒す。 王の妻 Dumo を味方につけ，王の秘密（魂のありか）を聞き出させて，王を殺害。 Dumo により毒薬を飲まされ，過去を忘れて暮らす（6年間）。	○Horpas の侵入と，妻 Dugmo をさらったことへの復讐—鍛冶屋の息子の生れ変わりとみせかけて Hor 国に住みつき，王 Kurkar と，その守護神たちを殺害。ボン教を改宗さす。
F	○中国への遠征 妃の死で気の狂った中国皇帝 Keeme Khan と対決（魔術を駆使）。皇帝を鎮静さす。 ○第2妻として皇帝の妹 Aralgo を得る。	○Aralgo をうばった12頭の巨人を退治—Aralgo に巨人の生命の秘密を聞き出させて殺害。（この後，Gessar は Aralgo により，忘れ薬を飲まされる。）

	第 3 の 冒 険	第4・5の冒険	取りもどした妻の処し方と結末
A			○妻（第1夫人）と幸せに暮らす。
B	○弟である王人公を裏切った兄3人を征伐。		○Zer-y-ong の城を東へ，Komyong の城を西へ，蛇王の城を南へ，自分の城を北（高地）にすえ，兄3人を東西南の守りに就ける。 ○3人の妻（鬼の妹と海蛇の姫）を連れ Rum へ，朝，鳥となって戻る。
C			○妻とHoryūl王と間の子2人を殺し，妻を連れ帰る。 ○皮袋を肩に，水汲みをさせる。 ○Kiser の質問に答えられたため王妃の座に就ける。 ○Kiser は偉大な王として君臨。
D	○留守中に'aBruguma をさらった Hor 王への復讐—乞食としてHor国へ入り，鍛冶屋の父娘の家に職人として受け入れられる。種々の奇蹟を見せ，Hor王催の競技会で勝利を納め，王を寝室で殺害。 （エピソード：攻めて来たHor軍を相手にした'aBrugumaの働き。Hor王に心を寄せた彼女の密告により，弱点である腋下を射られて果てる戦士の話。）		○妻とHor王との間の子供を殺し，彼女を連れ帰る。 ○馬の尾にくくりつけられ，引き廻しの後3年間の下女奉公，3年間の城勤め，3年間の石臼廻し，3年間乳しぼり，15年後に再びKesarと結婚式。
E	○Jang国王 Satham の殺害—Gessarは蜂に変身して王の体内に入り，殺す。 王の長男Yula（Gesarと同じ神の出身）を国王に就ける。 （次の10年間は隠遁生活）	○南の王Shiraigolの殺害—Gesar の腹心の Yula と Dikchen の活躍による。 ○King Tazig の殺害—伯父Todongの馬盗が原因で Tazig と闘い，彼の財宝を奪う。	○妻とHor王との間の子2人を殺し，妻を連れ帰る。 ○Gesarを含む神の出自の者たちは，瞑想の後，朝の虹に乗って天上へ戻る。
F	○Shiraigol国の首長Tsaganの息子の嫁としてRogmoがさらわれ，Tibetの英雄たちが戦死したことへの復讐—災いの原因を作った伯父Chotongの征伐。 （Aralgoに対し，罰を下す。死んだ英雄たちは生き返る。）		○Gessarは王位に就き，正義を実行。

の邪鬼の国を滅ぼし，彼を裏切った3人の兄を征伐し他の3人の兄に各地を治めさせ，自分は鬼の妹や海蛇の姫等3人の妻を伴い，鳥となって，ルムの国へ戻る。

3．ケサル英雄物語の変容

金子氏は，ケサル研究の現状を次のように述べておられる。「中国では，1980年代に入ると盛んにテキストの出版が行われ，収集研究等が続けられて『格薩尔研究』という雑誌も創刊された。（中略）ケサル叙事詩は，資料収集が行われるに従い，次第にその全貌が明らかになってきた。叙事詩の巻（一主題の物語）は，およそ（平均して，筆者注）60巻，106巻の名があげられている。（中略）これらには，写本と版本があり，（中略）異本の分類の仕方によって，その巻数の差異が出てくる」[金子　1987：409]。

このように，主としてチベット語の文献資料だけを見ても，ケサル叙事詩は膨大なものではある。しかし，フォークロアのレヴェルで，ケサル物語を成立させるための核となるようなモチーフは，それほど複雑多岐にわたるものではない。しかもそれは，大体において，英雄伝承に普遍的に見られるモチーフに過ぎないとも言えよう。すなわち，(1)天上界から，下界の邪鬼による乱れを平定するために，英雄が下る。(2)地上の女が，英雄を異常出産する。(3)異様な形態で生れた英雄は，一旦遺棄される。(4)英雄は幼い時は醜悪もしくは異形である場合が多く，忽ち成長する。(5)妻を得るための冒険や，その他いくつかの偉業により，邪鬼等を征伐する。(6)叔父，兄弟等の裏切りにより，妻を敵に奪われる。(6)彼等に復讐し，妻を奪還，敵を亡ぼす。(7)冒険の中では，敵や邪鬼の妻や妹を見方につけ成功し，彼女達を妻にすることも多い。

参考までに，上に述べたケサルの物語を，他の地域の文献に記載されたものと対照させてまとめた一覧を，[鈴木　1982] より転載しておく。（別表参照）

出典　（　）内の数字は初版

A（レプチャ）　"How King Ling Gyaso Subdued All the Devils," [Stocks　1975(1925)] .
B（レプチャ）　"The Adventure of Ati-azyak," [ibid.] .
C（フンザ）　"The adventure of Kiser," [Lorimer　1935 (1931)] .
D（ラダック）　"A Lower Ladakhi Version of Kesar Saga," [Francke　1909 (1905)] .
E（チベット）　*The Superhuman Life of Ling* [David-Neel　1978 (1931)] .
F（モンゴル）　*Gessar-Khan* [Zeitlin　1978 (1927)] .

4．レプチャの「ケサル」における世界観

レプチャの英雄リン・ギャソ（出典「**A**」）とアティアジャク（出典「**B**」）は共に，ルムの国から地上に転生したことになっている。ケサルの碩学 R. A. スタンは，「ケサル」と「ルム」は，「カエサル」と「ローマ」に繋がると述べているが [スタン　1971：26, 319]，実証性は乏しい。「**A**」「**B**」の著者ストックは索引の中で，「Rum-lyang (Rum の lyang＝国)」を，一つには「ある英雄が死んだ父親と話すために訪れたところ」と規定している。ストックのフォークロア資料を読むかぎり，ルムの住人は神々と祖霊であり，王様の一家や様々な動物がいて，普通の生活が営まれている。面白いこと

に，アティアジャクが地上に再生するためには一旦死ななければならなかったのであるが，物語の最終に妻を連れてルムの国へ戻る時には，そのまま飛翔してゆく。

英雄が下ってゆくところは，「**A**」では，Lyang-bar，即ち「世界の中心」の国で，これをレプチャはシッキムだと考えていたようだ[Stocks 1975：84]。しかしこの場合も，下界世界自体は，「**B**」の場合と同じ Ling-lyang（「リン国」）である。従って，チベットの伝承でケサルの出身地とされるリン国（詳細は［金子　1987］）と符合するわけである。

レプチャの伝承の世界では，この天界と下界との間にあるもう一つの中間の世界の存在が特徴をなしている。「**A**」では，アティアジャクと彼が一緒に連れてゆく片目の牛や片目の子馬などの動物が，一旦ルムの国で死んで，次に気が付くのは，この中間の世界 Sari-rung-dong-chen においてである。そこから下界を覗き，これから自分が宿る筈の王妃を認めて，動物共々一つの大きな霰と化し，彼女の元へ降りてゆくのである。「**B**」の場合も，中間世界の名称が Siri-nong-dong-chen と変る他は，ほぼ同様である。但し，動物達は今度は穀物と化し，リン・ギャソの巾着にしまわれてゆく。彼が霰と化して，それを食べた女に宿る点は変らない。

ストックの資料では，この中間世界に対してもう一つの名称がある。神々ルムと人の言葉[4]の仲介役であるブンティン Bong-thing の住む所，ティアムタン Tiamtan である。ブンティンは，今日のレプチャ社会においても一種のシャーマン的存在であり，殊に地方では病気治療等に深く関わっている。ストックが「創世の物語」と題した話を語った一人のラマ僧によれば，ブンティンは次のような経緯でこの世に登場した。

天なる造物主イ・モ It-mo は下界との仲介役として竹を送ったが，竹は山の頂に根を下して勤めを果そうとしなかった。次にかぶと虫を送ったが，やはり仕事を無視した。コウロギやキリギリスを送っても役にたたなかった。その時，造物主の手許には子供が一人しか残っていなくて手放したくなかったが，彼を，性根の良くない人間を助けるブンティンにしようと思い，下界へ行って兄弟姉妹であるヒマラヤの山や川の様子を見てくるように命じた。子供はイ・モに，一緒に持って行くものを要求した。造物主は彼に，しょうが，にんにく，よもぎ[5]を与えたのである。これらは，ブンティンが今日でも外用・内用にし，丸薬もこれから造られる。

ブンティンがヒマラヤの台地に降りてみると，既にそこは至るところがムン Mung—邪鬼—に占居されていた。ブンティンがあきらめて戻ろうとすると，ムンが条件を出してきた。もし人を病気で苦しめることがあっても，ブンティンが病人に付添って，鶏・卵・豚・山羊等の動物を犠牲にしてムンをなだめるならば，ムンは何もせずに病人の元を離れるであろう，というものである。この契約は，ヒマラヤの山や川を証人として成立した。これが，ブンティンの起源でもある。この後，ブンティンは天と地の中間にあるティアムタンに昇り，宮殿を建てた。ブンティンは今もそこに住んでいる，とレプチャの人々は考えているのである［Stocks　1975：23—5］。

実はブンティンは，ティアムタンに昇る前にもう一つの仕事を成した。それはこうである。「満足したブンティンは，ロンの人々（＝レプチャ）のために，大きな実のなる料理用のバナナとヤムイモとさまざまな竹[6]を植えた。一方，平原の原住民であるルム Lum には熱帯のシダ植物を，ブータンと中

国にはpa-laの一種を，チベットには象草（エレファントグラス）を植えてやった［ibid.］。ロンの地以外の所に植えた植物が，具体的に何であるのか特定しかねるが，あまり有用なものとは考えられない。従って，ブンティンは，レプチャの人々にとっては，食用植物をもたらしてくれた一種の文化英雄であるとも言えるのである。

地方，レプチャの「ケサル」は，戻って行く所はルムの国であり（「**B**」の場合），ブンティンとは異なるが，ルムの国の父から「**A**」の場合は（金の）弓矢・馬・犬・山羊・雄鶏，「**B**」の場合は（片目の）牛・雌馬・雌鶏・山羊を与えられ，それらを伴って地上に降りて来る。これだけでは意味が不明瞭かもしれないが，ラダックの伝承やデイヴィッド・ニールの採集したチベットの伝承によれば，前出の表にも示されているように，ケサルの降下と共に生活必需品や馬・馬具の類がもたらされた。ケサルは紛れもなく文化英雄であり，しかもどちらかというと，ブンティンとは対照的に遊牧民もしくは狩猟採集民のそれである。ケサルとブンティンはその機能の点で，興味深い異同を示しているのである。

3．カンチェンジュンガの儀礼と祭

1．ブンティンの儀礼

(1)　二つの調査事例

ブンティンの行う儀礼については，1984年と1986年の科研のシッキムにおける現地調査で，それぞれ一例ずつ扱っている。殊に1986年の場合は，ブンティンとその妻であり，且つ，ブンティンと同種の職能を持ちながら多少性格を異にするムン Mun[7]という，一組の夫婦による"カンチェンジュンガの儀礼"であった。この事例を少し詳細に述べておこう。

ブンティンは本名がソナム・ツェリング・タムサン（40歳位），ムンの妻は本名がヒルダム・レプチャ（32歳）。ソナムの兄と姉もそれぞれブンティンとムンであり，ヒルダムも父方がこの家系である。ブンティンは男に限られるが，ムンには男でも女でもなれる。共に世襲とは限らないが，家系の傾向性は強い。ブンティンの妻はムンとは限らないし，また，その必要もない。特定の儀礼を除いては，ブンティンもムンもそれぞれ別個に機能を果しているからである。正確な数は摑めなかったが，地方におけるレプチャの社会では，病気治療等にあたる彼等の存在意義はまだ失せてはおらず，従って，それに応えるだけの人数が存続していると考えられた。

調査はガントク郊外の彼等の家の一室で行われた。それは本来ならば，収穫後のマラボ月（11・12月頃）に，収穫をカンチェンジュンガの山に感謝して行うもので，チュ・ファ Chu Faat（チュは「カンチェン」，ファは「奉納」の意）と称せられるものであった。祭壇の設定は極めて念入りで具体性に富み，かつ，それぞれは象徴的・示唆的で，綿密なる具象性を求めるレプチャのストリー・テリングとの共通性を思わせるのに十分であった。

5・60センチに切って立てた3本の青竹は，カンチェンジュンガを中央にしてカブルとパンディムの3高峰を示し，竹の上部切り口に卵をのせて冠雪を表した。3本の竹に張り渡した紐から下がる5色（青・白・赤・緑・黄）の幡は山にかかる虹，これら全体にかぶさる薄い白布は白く光る空を表す。

この祭壇の前にはこまごまとした供物がならべられた。米粉を練って造った5つの円錐体はカンチェンジュンガの5峰であろう。前に灯明，卵，竹筒に入った「チー」と呼ばれる酒等，更に外側には，米，ヒエ，バナナ等を盛った皿や水を張った桶がならんだ。葉のついた小枝を手にしたブンティンとムンは，枝を水に浸しては振りあげて水を撒きちらす。その後，立ったり坐ったりしながら，二人で交互に歌や唱文を繰りかえした。ほぼ20分位で終り，これが一般的な長さだということだった。尚，この儀礼に先立ち動物が犠牲にされたと聞かされたが，実際には見ていない。

次に，1984年に，ガントクから22•3km離れたペンサン村で調査したブンティンの儀礼の模様について簡単に触れておきたい。ブンティンのドゥブギュドゥ・レプチャ（60歳）が行なった儀礼リャン・ルム・ファ Lyang Rum Faatは，言葉の意味としては「ルムの国に捧げる儀礼」であるが，彼自身は「リャン・ルムは自然界の霊を表す，収穫の前とか何か災のあった時に行う」と説明した。家から離れた所で行わなければいけないということで，山腹の畑の畦に場が設定された。

細い竹の節を5.6cmに切断したものが7つ用意され，酒を入れてバナナの葉で一つひとつ蓋がされた。他に灯明，卵一つ，いく列かの花(頭だけ)，シコクビエの皿等が並び，米が撒き散らされた。7つの竹筒は，山・川・木・石などの神プン・ゾク・ルム Pum zok rum とか，収穫・穀物の神シク・ルム Sikoo rum とか，家神フォ・ロ・モロ Fo lo molo，病神ノロン Gnolon 等を表した。儀礼の終りにはトランス状態に入るとのことだったが，このときは最後に膝が震え出した程度に終った。彼の家は4・5世代世襲的にブンティンであり，活動範囲も北部シッキムの20か村にわたっていた。

(2) ゴレルの事例

先の事例の調査の際に，ブンティンとムンが協力して行う儀礼として三つほどがあげられた。収穫を感謝するカンチェンジュンガの儀礼（チュ•ファー），洪水伝説に因み8月頃，水平足の折に行うテン・ドン・ファー，及び新築の際に，家の神に対して行うリルム・ファーである。ブンティンとムンの両者が関わる儀礼は，一人で行うものよりも当然規模が大きいものと考えられる。ゴレルは，これに関連したことを次のように述べている。ムン[8]の行う圧倒的多数の儀礼が，専ら個人の利益のために為された。共同体全体のために，つまり共同体の人々の参加のもとにムンが犠牲を捧げたり，予言をする場合はほんの僅かで，一つは雨期の始まる前に，あと一つは冬の始まりの前に行われた[9]。目的は病気を共同体に寄せつけないためである［Gorer 1984：228］。

ゴレルはこれにひき続き，1937年3月28日に，シッキムのリンテム村で実際に観察した前者の例を報告している。概要を記すと，ルム Rum と呼ばれたこの儀礼（セレモニー）は，まず邪神への供儀で始まる。大きなかごに土を入れてバナナの葉で被い，そこへさまざまなものを突き差す。花を挿した竹筒，水やミルクやチー（酒）等の入った竹の容器，雲母片，糸で飾ったにがよもぎ，卵，穀物の山，干した魚やしょうが，そしてさまざまな食べ物を木の葉に包んで棒の先に縛り付けたもの等。実際は，こうして出来上がった作り物をルムと称するのである。供儀が終ると，ムンは神々勧請の唱えごとを述べ，卵を額に押しあて気持ちを集中させて，卵の中の黄味に見えてくる線によって，その年の病気に関する吉凶を占ったのである。

ゴレルはもう一つの方の共同体の儀礼にも言及している。それは Tsandong と呼ばれるもので，カ

ンチェンジュンガと平地の神々に対する供儀が中心となる。米，バター，チー，ルピー(札)，そして卵が供えられる。まず，穀粒と絞った酒が撒かれ，次いで山羊が捧げられ，後に屠うられた[ibid.]。

ゴレルの報告によるムンの儀礼の二つの例は，奇しくも，科研の調査で対象になったものに極めて類似していると見ることができる。ゴレルの調査時点からは半世紀を経ているが，カンチェンジュンガを祭り，疫病を退散させるという二つの儀礼は，その設定の道具立ても含めて，それぞれほとんど変質していない[10]。殊に，竹・バナナ（この二つは，上記の伝承によればブンティンがもたらしたものである)，チー(酒)，穀物，そして鶏の卵等の供物の種類に変化のないことは，当然のようでいて，だからこそ意味があると考えられるのである。

2．レプチャ族とカンチェンジュンガ

(1) 示現としてのカンチェンジュンガ

ストックも含め，カンチェンジュンガを祭ること等から，レプチャ族をアニミスティックな民族とするむきは多い。これに対してゴレルやモリスは異を唱える。例えばゴレルは，「アニミズムが，自然物が力をもつゆえに自然物を崇拝するという意味であるならば」レプチャはその範疇に入らない，という。彼等にとって，超自然的力（善も悪も）は，さまざまに具現した姿をとり，山も川も天然現象も，それらの栖にすぎないのである [Gorer 1984：76—77]。カンチェンジュンガにしても同様である。カンチェンジュンガそのものが神であるとは，考えないのである。

ストックが採集した伝承の一つによれば，造物主イ・モ It—mo により，まずヒマラヤの山々が造られ，そこに長男長女が住み，次男がルム・リャン（天上界）に住んだことになっている [Stocks 1975：19]。モリスが採集した伝承では，カンチェンジュンガは邪神達の長であり，その姉娘はチョモ・ラ・リで，妹娘がゴントゥク・ロであるという説もある [Morris 1938：18]。

エベレスト，K2に次ぐ世界第3峰のカンチェンジュンガ(8630M)とレプチャ族，あるいはシッキムとの結びつきを説く伝承は更に複雑である。しかもそれ以前に，カンチェンジュンガの語源，その意味，ローマナイズの方式自体が百家争鳴と言っても過言ではなく，片カナ表記すらも議論を伴うようだ[11]。それらの言語的な問題に触れることは，本論の主旨からは少しく離れるため，カンチェンジュンガの意味は，大方の見方である "five repositories of the great snows"（「五つの雪山による五つの宝の倉」[12]）としておきたい。そしてここでは，前者の結びつきの問題についてだけ，簡単に言及しておこう。ヘルマンは，レプチャの自称ロン Rong が「頂」を示し，レプチャの故地＝カンチェンジュンガとの繋がりが成立したと見る [Hermanns 1951：29]。ネベスキーは，もともとカンチェンジュンガはブータンのある一族の守護神の山だったが，ブータンがシッキム王の祖先に戦いで敗れた後，シッキムでは哀れんでその山を祭るようになった，と述べる [Nebesky 1975：237]。

(2) 山の彼方にある世界＝Mayel

しかし，こうした観念的議論はレプチャの具象性を重んじる性格とは相入れないものではなかろうか。事実，レプチャ族がカンチェンジュンガを見るときは，もう少し具体的な思考方法をとっていることが，既に指摘されてきている。まさに "山（＝カンチェンジュンガ）の彼方の空遠く" に，レプ

チャ族はもう一つの別の世界を想像し伝承しているのである。ゴレルの報告によれば，カンチェンジュンガの背後のタルン谷を登って行ったどこかにマイエル Mayel の国がある。その住人は7人の兄弟からなり，それぞれが何等かの農産物のパトロンである。この7人がレプチャ族の先祖であり守護神でもある。彼等は人間同様，地上で暮しているが，死ぬことがない点は神並でもある［Gorer 1984：236］。*Folk Tales of Sikkim* が伝える物語では，この国に迷い入んだ猟師が，7人の兄弟から7種類の種をもらって来たとされている。住人は，朝は子供，昼に成長して夕方には老人となり，翌日は再び子供になるという性質の人々であった［Kottran 1976：32—4］。

シーガーの表現によれば，この国はカンチェンジュンガの中腹にあたりに存在し，住人は7組もしくは9組の夫婦で，甲状腺の肥大した毛むくじゃらの小人のような者たちである。（彼の論文のテーマである「雪男」と関わる存在である。）麓には人間の起源となる女性神，頂にはレプチャ族の守護神が住んでいる。ここには田畑に実りをもたらすもの総てが関わり，米，トウモロコシ，麦，ヤムイモ，カボチャ等は，その住人によってもたらされたものである［Siiger 1978：426］。

マイエルの国からもたらされた穀類の種類を限定している場合もある。ゴレル等の報告では，それは陸稲，黍，トウモロコシの3種であり，そのための収穫を祈る儀礼サキョ・ファーSakyo—Faat が，毎春各家毎に行われた。これは，マイエルから毎年やってくる渡り鳥が，種播時を教えてくれるという信仰とも関わっている(13)。他方，大麦，小麦，蕎麦，水稲は，カンチェンジュンガの神（それはシッキムの神でもある）Kongsen—bu によってもたらされ，これに対しては特別な儀礼はないという［Gorer 1984：238—9］。

前出の伝承においても示されているとおり，かつては，こちら側（人間界）とあちら側（マイエルの国）とが住来可能な時があった。「ところが，今は閉されてその道はナイフの刃のような状態で，通行不能である。道中には3人兄弟の護国神がいて，長兄は Mayel Yook rum（これは Pong rum ともいう），末の兄弟は人や動物を食べてしまう恐ろしい Mi—tik と Tom—tik で，それぞれアイベックスとじゃこう鹿の守護神でもある」［Gorer 1984：236］。こうしたゴレルの記述，およびストックの報告等を大幅に援用したヘルマンは，Pong rum を表すさまざまな呼び名を紹介しながら，この神の狩猟神（ハンターの神）としての性格を明示した［Hermanns 1954：47—8］。更に，これらの事例や記述の総てを継承した上で議論を展開したシーガーは，カンチェンジュンガとその背後に控えるマイエルの世界に，レプチャの宗教観や世界観における狩猟的複合観念 hunting complex と，農耕・多産的複合観念 agricultural fertility complex の，緊密に絡み合った現場をとらえたのである［Siiger 1978：426］。

3．カンチェンジュンガの祭典

(1) カンチェンジュンガをめぐる表と裏

「レプチャ語辞典」を見ると，Mayel は掲載されておらず，Mayal の項に“purity”とだけある。従って，これが上記のマイエルの説明であるという確定はできないが，コットランのフォーク・テイルの中でも，住民は老いて翌日はまた子供に返るという，永遠不変の象徴的な生活を送っている。祖

霊の安らう所でもある。このMayelの静けさに対して，カンチェンジュンガの方のイメージは，力強さが先に顕つ。

Gazetteer of Sikhim によれば，シッキムの神々の中で最も主要なのはカンチェンジュンガの神とその従属神のヤブドゥ Yabudud である。前者は何もしない穏やかな性格で，「宗教の保護者[14]」としてのスタイルをとるが，後者は "the Black Father Devil" を意味する名をもち，性格は行動的で悪意を秘め，血の犠牲，特に黒い雄牛のそれを要求する。カンチェンジュンガの五つの峰はそれぞれ動物の名を冠し，最高峰を "Head of Tiger" として以下，ライオン，象，馬，ガルーダ（金翅鳥）となる[Waddell　1985：355]。しかし，この対応関係とは少し矛盾するのであるが，カンチェンジュンガの神自身は図像学上，勝利を示す幡と財宝の象徴であるマングースを手にし，白い獅子（ライオン）[15]に乗った赤い色の神として描かれるのである。

雪と氷に閉されて人を寄せつけず，陽が昇れば最初に赤く輝く霊峰カンチェンジュンガが，既にモリスの言葉として引用したように，"the lord of all the devils" としてもとらえられるのは，ヤブドゥで象徴されるような属性のためである。しかし，それと同時に，この峰々の向う側にマイエルのような清浄無垢な地の存在を想像したことは，言うまでもなく決して特異なことではない。ヒンドゥー神話の中にも，全く同一のパターンが見られる。ヒマラヤとスメール山の関係である。

例えば次のような説明がある。……これら（法隆寺）の4天王（広目天・増長天・持国天・毘沙門天）は，インドの前アーリア的宇宙観によれば，宇宙の中央に聳える四角形のスメール山の4斜面を支配する。この山はどうやらヒマラヤ山系の北あたりに位地すると思われ，卵型をした宇宙の垂直軸となる。宝石をちりばめた斜面には，ナーガやガンダルバやヤクシャのような半神族が住い，頂上には，こうした "死ぬことなきもの" の宮殿があり，"不死なる都" とされている。これがヒンドゥー・パンテオンの王インドラの都である［Campbell　1983：47］。

マイエルの構造をこれと比較してみるとき，興味深い対照に気付かされる。既に述べたように，マイエルへ至る道中を――それはもう今では，接近不能なのではあるが――3人兄弟が警固にあたっている。特に末の2人は兇暴であるが，それぞれヒマラヤの珍獣であるアイベックスとじゃこう鹿の守護神でもある。長兄は狩猟の神であった。2神に守られたこれらの獣は，ヒマラヤの奥深く分け入った猟師にもなかなか捕まらない。マイエルの国は更にそのずーと奥の方である。スメール山がヒマラヤをも従えた垂直構造の中に設定されているのに対して，マイエルはどちらかというと，勾配のある水平構造の中に置かれているのである。

垂直構造では，関係は常に上下の関係としてとらえられがちだが，水平構造では，それはあちら側とこちら側，つまり表と裏の関係を際立たせる。朝晩の陽の光を照り輝やかせる白い雄姿をカンチェンジュンガの表側とすれば，黒い岩肌のごつごつした，人を寄せつけない面は裏であり，ヤブドゥがそれを象徴する。自然界の威容そのものと言えるカンチェンジュンガに対して考え出されたのが，その奥津城なる不変連続の清浄な世界マイエルではなかろうか。穀物の豊作を司り農事暦を渡り鳥に託して教える，農耕民の精神的源泉の背後では，警固の3兄弟が象徴するような，動物の血の犠牲を払った狩猟民のエネルギーが支えとなっている。しかも，狩猟と一口に言っても，捕える側と捕えられる

側には，それぞれに守護神がいて，表裏の関係が兄弟の関係でもあるという，この世の営みの機微を見事に具象化しているのが，このレプチャの世界観なのである。恐らく，具象化の得意なレプチャの人々が，巧まずして造り上げた人生観の一面でもあろう。

(2) カンチェンジュンガの祭典とレプチャ族

これまで，カンチェンジュンガをめぐるさまざまなコンテクストの解読に努めてきたが，中でもこれから扱おうとする祭典が恐らく最も規模の大きなテキストであろう。

シッキムにおける科研の調査中，1986年8月19日がこの年の仏教暦（陰暦）7月15日にあたり，パン・ラブソル Pang Lhabsol（「王家の祭礼」），つまり恒例のカンチェンジュンガの祭が，ガントクにある宮殿併設の寺ツック・ラカンの広場で行われた。これまでに述べたカンチェンジュンガの儀礼がブンティンやムンによる土俗宗教的なものであったのに対して，こちらは，チベット仏教僧（ラマ僧）による国家的行事である。

祭礼に先立ち一週間前から伝統に従ってペマユンツェ Pemayangtse 僧院の僧達によりプージャ・祈りが始められ，当日も夜明け前からツック・ラカンで，王族を中心とした鎮護国家祈願のプージャがとり行われた。インドの政府組織に組み込まれてしまっているシッキム王室ではあるが，第13代チョギャル（王）となる筈であったプリンス・テンジン・ワンチュックを先頭に，王族の面々がプージャのために再びラカンの中に姿を消した午前9時45分頃から，祭は正式に開始したのである。マニ車（祈禱車）や念珠を手にした信者達も，思い思いにラカンの周囲を時計回りに回り出し，アチャルと呼ばれる仮面を付けた道化師が，木の枝を振りまわして観客を盛んにからかっていた。

王室のプージャ＝ラブソル Lhabsol が30分で終り，一族が広場のテントの下の特別席に落着かれると，9人の僧達による楽器演奏をしながらの最初の踊りラル・チャム ral cham が，グランドのポールを中心に旋回して繰り広げられた。楽器の構成は，ンガ（柄付き太鼓）3，シンニェ（フラットタイプのシンバル）2，リャゥム（シンバル）4である。チャルメラ系の喇叭ギャリンの演奏も後に行われた。楽器はこれらの他に，グランドの外に小さな銅鑼ティンティンと一対のケトルドラム・サンガ置いてあって，後の行列行進等の時に用いられたのである。

観衆が盛り上がりをみせてきた11時頃，この祭の異名ともなっているパンティエ Pantie，または「ウオリアーズ・ダンス，戦士の踊り」が始まった。4本の旗を立てた冠にチベット的装束の13人（正式には15人）の戦士は剣と楯を手に，激しく踊る。間も無く，赤い仮面の上に5つの頭蓋骨を頂いたカンチェンジュンガ（ゾンガ神）が赤い旗をかざして登場，威風堂々と踊る。彼の乗物である白い馬も控えている。そして12時近く，カンチェンジュンガの分身，と言うよりはゾンガ神をガードし，そのカルマ（業）に従ってゾンガ神を導き支配する，青い（＝黒）仮面のヒシェイ・ガンプ（ヤブドゥ神）が黒い旗を掲げて登場した。後ろには，彼の乗物である黒い馬が控える。祭のクライマックスを迎えたのである。（実際は，この頃から土砂降りとなった。）

この時，後者の黒い神は，「ヤブドゥ」とは言わずに，「マハーカーラ」と呼ばれることが多かった。その属性を持ち出すまでもなく，この対応は容易に理解できることである。同時にゾンガ神も，ヒマラヤの財宝神でありヤクシャ達の支配者でもあるクヴェラと対応させることができる。クヴェラは日

本の毘沙門天に相当することからも判るとおり，カンチェンジュンガの武士としての，戦いの神としての属性をひき出す最大の誘因になっていると言えよう。この後，祭は昼食をはさんで再び戦士の踊りや歌，儀礼に似た行い，行列行進等があって，午後3時過ぎに終了したのである。

この祭がいつ頃から始まったのかを示す確たる資料は，管見にして筆者は知らない。現地では，「戦士の踊り」は第三代王チャドル・ナムギャル（1700—1716）の時に，レプチャとブーティアの血判状による兄弟の契りを記念して行われ出したとする。シッキムの歴史における，レプチャとブーティアの相互依存の形態については，中根千枝氏の記述が詳しい[中根　1958：24—6]。その中で氏は，「シッキムのラマ教が土着のレプチャの信仰を多くとり入れていることは，現在でもよく伺われる。例えば，シッキム・ラマ教徒はカンチェンジュンガを彼等の最高の守護神とし，お正月のラマ僧踊の一つはカンチェンジャンガの踊が有名で，チベットのラマ教と多少様相を異にしている」[ibid., 25]。

中根氏の上記のシッキム現地調査は1954年から翌年にかけて行われたのであるが，その20年前にゴレルと共に，この地でフィールドワークをしたモリスが，筆者達が1986年に調査したのとほとんど寸分違わないカンチェンジュンガ祭を見て，かなり仔細に報告していることは特筆すべきであろう。フィールド・デイトは1937年8月21日ある［Morris　1938：274—6］。

4．儀礼における道具立・そのコスモロジー

1．ケサルの霊験

先の章において，カンチェンジュンガをめぐる全くタイプの異なった儀礼（祭礼を含める）を概観することができた。白い薄布や白い卵で象徴されたカンチェンジュンガの神秘と清浄さに包まれた姿も，国家儀礼と結び付くと，黒や赤のおどろおどろしきディーモンに変貌してしまう，その両極の甚だしさは，ある意味では，レプチャやシッキムの文化の一面を象徴しているのかもしれない。既に述べた，表と裏の構造の典型的な表われ，と言うことができるかもしれない。しかし本稿2章で，伝承の中の英雄として扱ったケサルも，実は同じような変貌をコンテキスト次第では追られるのである。

ガントク市内で尋ねてみた限りでは，ケサルの名前はともかく，物語を知っている者は必ずしも多くない。知的レヴェルや育った環境が大きく作用している模様だった。ケサルを祭神としている寺を捜そうとしたが，沢山ある筈だと言われるだけで，それを具体的に確定するまでには至らなかった。また，それは隠された祭神である可能性も強かったのである。

しかし，戦う英雄としてのケサルの名前は，それに相応しい場所を与えられていた。先のカンチェンジュンガの祭の最後，「戦士の踊り」が終ってマハーカーラ（ヤブドゥ）が一人グランドに出て踊るのであるが，その後，戦いの勝利と平和を祝う行進（ゾンコル zonkol）がラカン（寺）とグランドの周囲で行われ，その時戦士達によって歌われた歌の中に，ケサル（ケサル・ゲ・ポ Kesar—ge—pho）の名が出てきたのである。因みに，ケサル・ゲ・ポの妻で，この世の誰も及ばない美しさをもったサウチュン・ドマの名も比較的良く知られていた。ケサルを軍神中の軍神とするチベットにおいては，ケサルの名は，例えば次のような祈禱文の形で表われる。「『風の馬』（後述）の栄光の旗の主よ，軍神中の大王よ。悪魔を鎮めるものよ，人間の中のすぐれたものよ，ケサルよ，汝は崇められよ，汝は崇

められよ，汝はたたえられよ，偉大で力強きものよ，われらの力ある男神たれよ，……」[スタン 1971：244]。

ところで，この『風の馬』ルンタ *lung—ta*（*rLung—rta*）は，文字通り，ペガサスのような「風に乗る馬」を指し，祈禱の為の旗である。個人の幸運を風に乗せてどこへでも運ぶことができると信じられている。本来は中央に馬を描き祈禱文をプリントした小さい四角い旗ルンタは，チベット仏教文化圏の至る所で，他のさまざまな旗と共に沢山はためいている光景が見られるのである。極めてリアルな表現をとった旗だと思われるが，それは，こと旗に限ったことではない。信仰や儀礼に関わる道具立は，既に述べたように，著しく具体性を帯びたものであり，次に少しそれらにまとめて触れておきたい。レプチャ族だけに特有なものでは勿論ないが，それらを抜きにしても，また考えられないからである。

2．小道具が創る神と邪神の世界

(1) トルマ *torma*（*gtorma*）

チベット仏教（ラマ教）の僧院や寺や家庭の仏間の祭壇には，麦粉，蕎麦粉，水，バター，ミルク，等を捏ねてあげて作った大小様々な供菓がおかれている。普段は花びら型や小さな円錐型のようなシンプルなものが多いが，何か儀礼が行われる時は，彩色を施された複雑な造型が要求される。これから祭ろうとする神や邪神そのものや，その住処を象徴するもので，本来はボン教徒の信仰に基づくものとされ，「血の捧物の代用」[Tucci 1980：208] とか，「犠牲の供物 sacrificial cake」という表現もされている。詳しくは，その形態図も含めて [Nebesky 1975：344—364] を参照されたい。ただしこの文献はチベットに関するものであり，レプチャには当てはまらない部分が多い。モリスは「聖なる食べ物 holyfood」という表現をとっている。

カンチェンジュンガの祭の当日，筆者を含む科研の調査メンバーは，ラカン（寺）の内部へ入ることを許されず，平常時の内部と供物しか目にしていないが，モリスが調査した頃の，カンチェンジュンガを祭るためのトルマがどのようなものであったかを，次に少し引用しておく。1937年3月25日のことで，明記していないが，恐らく春の農事を始める前の，カンチェンジュンガへの祈願祭のようなものであったと想像される。

その前日，3人のレプチャは，一日がかりで非常に手のこんだポン・ルム *Pong Rum* と呼ばれるトルマを作った。それは，50cm程の長さの木の板に，五つの供物を載せたもので，中央のそれは他よりも大きく，ジュンガ Jung Ngaw に捧げられる。他はその周囲の4峰に捧げるものである。これら五つの主となる三角錘の間隙をぬって，様々な形をした従者や大臣や召使やその他弱小の神々を表す小さなトルマが所狭しと置かれ，その数200を越えて，板に載らない分は別の盆に載せられ，しかも一つひとつが固有の名前をもっているということであった。祭の後，これらは壊されて，人々が共食するのだった [Morris 1938：270—1]。ポン・ルムは，既に述べたが，マイエルの国の神の名でもある。このことは記憶しておく必要があろう。

(2) デュオ *deu*（*mDos*）

本稿の第3章第1節でブンティンの儀礼を具体的に示した際，カンチェンジュンガをなぞらえた祭壇に吊された，虹を表す五色の幡についても言及したが，この色彩は別の形で，儀礼に重要な関わりをもっている。1986年の科研の調査で，レプチャの葬儀を実際に現場で扱った際，数人の男達が総出で，御輿のような枠組にさまざまな色彩の糸や紐を隙間なく巻付けて，小1時間で鮮やかな造りものを完成させるのに立ち会った。儀礼が済めば解体される。これもデュオの一つであるが，通常はこのような立体ではなく，平面的なものであることが多い。

ネベスキーは，蜘の巣に似た「糸十字 thread—cross」という表現をしている。「これはトルマと同様に，……魔術的な儀礼において，僧が邪神をそこに引き付けようとする檻のようなものである」[Nebesky　1975：369—371]。相手が邪神の場合は"檻"かもしれないが，ゴレルは「宮 palace」と言っている(16)。

ゴレルが報告しているカンチェンジュンガの儀礼は前に引用したが，そこにはひき続いて更に詳しく儀礼の経過や周囲の状況が記されており，デュオについては，その由来譚にも言及している。この時に作られたデュオは，長い竹竿に，糸を張った角や三角や六角形やその他の形をした凧状のものを九つ付けたもので，「九層の宮 nine—storeyed palace」と称している。「完全に4時間を費やしたこの宮は，チベットのダヨム Dayom と呼ばれる昔の王様の亡霊を鎮めるために作られるものである。彼は生前，自分の宮殿や僧院を破壊され住まう所を失ったために，その霊がうろついて人々に害を与え，復讐しているからである」[Gorer　1984：229]。この話が，この時のデュオにだけあてはまるのか，それとも普遍的に通用するのか，未だ確認していない。

(3)　卵

先の二つはチベット仏教（あるいはボン教か？）に共通した道具立であるが，特にレプチャの儀礼において，顕著な道具立の一つである卵について，注目しておきたい。世界卵型説や人や氏族の卵起源説は，インドやチベットの普遍的に存在するテーマではある。スタンもネベスキーも，そうした例を詳細に扱っている［スタン　1971：206—9，他］[Nebesky　1975：300—8，他]。従って，レプチャの人々が儀礼の祭壇に必ずと言って良いほど卵を供え，且つそれを実際に手に取って儀礼の中で用いるのも，上記に示される普遍的思想背景と決して無縁ではなかろう。しかし，どこまでか，あるいは，どこからか，レプチャ固有の思考体系もしくは宇宙観とも関わる部分が存在するのではなかろうか。本稿では，紙幅が許されないため，別の機会に是非取りあげてみたいと考えている。

5．お　わ　り　に

1．レプチャ文学が果す役割

1986年，シッキムでの調査中，「シッキム・レプチャ文学会 Sikkim Lepcha Literary Organization」の会長以下役員数名が，調査隊の泊まっていたホテルへ挨拶に来られた。その内半数位は，既に前会1984年の調査の時の顔馴染である。しかし，その時は，この組織の存在を知らされなかった。職業は，開発技術分野，放送・新聞関係，役所勤務と多様で，調査隊の仕事を手伝ってくれていた青年達も，皆この組織に何等かの繋がりをもっていた。儀礼の調査をしたブンティンのソナム・ツェリング・タ

ムサン氏もメンバーの一人で，伝統文化の保持者・実践者として，かなりの敬意をはらわれている様子であった。彼は「レプチャ・プレス」の本部の所属でもある。「レプチャ・プレス」は，レプチャ文字による記事をメインとした会の機関誌で，主要な活動内容の一つであった。

シッキム人口の12%を占めるにすぎないレプチャ族の文字が，会の機関誌の中とはいえ，現役で用いられているということは，驚きであり，ある種の感動さえ伴う。しかも，外国人の調査隊のところへ，役員一同うちそろって挨拶に来られ，メンバー宅での招宴もあったということは，この会の活動に関する何等かの示唆を与えるのに十分であったといえよう。今，世界は，メジャー言語による情報伝達の単純化が進む一方で，マイナー言語の数は増加の傾向にあるという。多様な民族を統合してでき上がった近代国家が，再びエスノ化しだし，ある種のエスノセントリズム（自民族中心主義）的性格さえ帯び始めたと言われる。1987年11月号の『中央公論』における青木保氏の「文化の否定性――反相対主義時代に見る」が話題を呼んだのも，こうした世界的動向が意識されてのことであろう。

今日，レプチャの人々が，自らの固有の文化を求めるとき，それはどのあたりから引き出されるのだろうか。ブンティンの儀礼であろうか。しかし，それは，キリスト教化した多くのレプチャ人のそれとは異なることは明らかだが，レプチャ固有のものかどうかは不確かである。固有性の追求は，レプチャの場合に限らず，砂上の楼閣となることが往々にしてある。しかし，ある時代・ある場所で見られた現象だけは，地表に顕われない根の部分の浅さ深さや種類を問わず，現実のこととして捉えることが許されよう。要するに，レプチャ族の場合，いわゆるイーミックなアプローチは，かなり困難だと思われる。アプローチしても，結果的にそうならない可能性が強いのである。

2．レプチャの思考形態

本稿において扱っているブンティンのカンチェンジュンガに関する儀礼等も，果してレプチャ本来の儀礼であるのかどうか，実際には確証されているわけではない。ブンティンやムンのようなシャーマン的存在は，ヒマラヤ地区のチベット・ビルマ語系諸族に共通してみられるものでありながら，チベット側の資料を除いては，それらの人々のカンチェンジュンガに対する態度が何も調査されていないために，比較する術がないというのが実情である。こうした諸条件を念頭に置いた上で，以下にレプチャの儀礼や伝承において見られる，幾つかの特色と思われる思考形態をまとめてみたい。

(1)　具象的箱庭思考――見立ての文化

レプチャ族が物語好きであり，その語りの世界において，極めて具象的且つ詳細であるというゴレルやモリスの指摘は，やはり特筆すべきことであろう。「ある所」に「ある人」が，ではなく，可能な限り特定される傾向にあるという。「ある人」「ある動物」も，語り手は石等を地面に置いて具体的に明示しながら話を進めるという報告もあった。

恐らく，この性格とブンティン等の儀礼におけるセッティングの念の入れようは，無関係ではあるまい。そのように考えなければ，カンチェンジュンガの五峰に見立てた竹の棒（実際は3本立てただけだが）の上部に白い薄布をふわりと掛けて，輝く空を表そうとするなどは，一見たわむれのように見えさえする。思考の中にあるものを，或いは儀礼に関わる世界の総てを，一望のもとに設定し，丁

度箱庭のように，一つひとつのコピーを置いてゆく。恐らく，その一つが欠けても，儀礼の宇宙は構成されないのであろう。

また，この思考は，先に述べたような超人的存在を考えるときのレプチャの水平型思考とも関連する。俯瞰的箱庭とは矛盾するようであるが，人と超人的存在が垂直構造で結ばれる時は，横の拡がりをもった箱庭の様々な道具立は必要ないからである。ついでながら，竹が豊富で，竹細工に秀でた才能が儀礼における様々な見立てによる道具作りにも生かされているのではないかという指摘もしておこう。

(2)　農耕的・狩猟的思考

ガントク近郊の特定の地域での調査しか許されていないため（現地人でも奥地へ行くには，許可が要る)、狩猟儀礼を調査できなかったのは残念であるが，カンチェンジュンガを祭る農耕儀礼においても，儀礼を始める前に，動物の犠牲を捧げているという事実は興味深い。日本の農耕予祝儀礼(田楽，神楽等）においても，鹿打ち神事のような狩猟儀礼が組み込まれている例が多いことと併せて考えてみる必要がある。〈山の神—狩猟の神—豊穣の神〉という連鎖は日本の稲作儀礼を支える根本原理の一つとなっている［鈴木　1987：72—6］。

全く同様の思考構造がレプチャにおいても見られ，〈山の神(カンチェンジュンガ、もしくはその背後のマイエルの世界）—狩猟の神（マイエルの3兄弟の長兄，Pong—rum）—豊穣の神（マイエル自体，実りの保護者)〉の一体化は，マイエル（あるいは，カンチェンジュンガと言ってしまっても良かろう）を要(かなめ)として，有機的な世界（シーガーの言葉を借りれば，hunting complex と agricultural fertility complex，加えて彼は origin complex とも言っている）が形成されているのである。

(3)　軍神化したケサルとカチェンジュンガ

シッキム最大の祭の一つといわれるカンチェンジュンガ祭 Pong—Lhabsol が，レプチャ自身の文化とどのような関わりになるのか，今のところ，まだ，明確な解答が出せない状態にある。ブンティンの儀礼において，空を表す白い薄布と，雪を表す白い卵と，虹を表す五色の幡に飾られていたカンチェンジュンガの姿は，この祭のどこを捜してもない。カンチェンジュンガの分身たるヤブドゥの五つのされこうべを冠にした赤いマスクと，彼を支える原理であるマハーカーラの黒いマスクの2体の威容な姿に変貌をとげ，15人の戦士と共に，戦いとも競演ともつかぬ踊りを展開する。2体のマスクは，理念としては保護者であるが，一見，戦いの相手のようでもある。倒す者と倒される者の，この屈折した相関関係は，丁度，バリ島のバロンダンスにおける魔女ランダと聖獣バロンの関係にも似て，倒錯したアンヴィバレントな価値を生み，このことだけを取りだしても，一つの興味深いテーマとなりうる。(参考［中村　1983]）しかし，これは最早，レプチャの世界観の域をこえたところの問題であろう。

ケサルに因むフォークロアの方は，本来がチベット系のものであるから，レプチャとの関わりの変化もカンチェンジュンガの場合とは自ずから異なり，こちらは，汎チベット仏教文化圏的共通の変質を遂げていると思われる。ケサルが今日，口頭伝承のレヴェルでの物語として，地域の人々の関心の対象になることは少ないであろう。と言うよりも，口頭伝承の機会そのものが少なくなってきている。

中国やブータンで編集が推進められているような，何巻何十巻にも及ぶ記録文学としての「ケサル」が，今日最も広く関心を集めているケサルの姿である。いま一つの姿は，カンチェンジュンガ祭の戦士の踊の中で歌われているように，軍神としてのそれである。広範囲にデータを集めてみると，必ずしも軍神としての機能ばかりではないが，少なくとも，何等かの御利益をもたらす神あるいは守護神となる信仰の対象として，ケサルは機能しているのである。仏画のイコノグラフィーにおいても，その性格は明白である[17]。

シーガーが収集した文献資料の中に，ブンティンが行う儀礼をレプチャ文字で書き留めたものがあった(注9を参照)。そこに，今は行われなくなった儀礼として，戦争に関わるものが幾つか示されている。「兵士を送り出す時の儀礼」とか，「留守宅の儀礼」等だが，その儀礼の中でケサルが扱われていたかどうか，いたとすれば，どのような形で扱われていたのか，今後の調査が望まれるところである。

カンチェンジュンガとケサルも，戦士や軍人の守護神として，実際に威力を奮った時代や時期があったであろう。戦う相手は異国や異民族ばかりでなく，異宗教でもあった。ブータンでは，ケサルは，ブータンへ仏教をもたらしたパドマサンバヴァ（＝グル・リンポチェ）の化身，すなわち，ブッダの化身と考えられており，1950年，つまり中華人民共和国が成立してチベットがその支配下に入った頃，中国への脅威から，初めてブータンに三つのケサル・ラカン（寺院）が建立されたと言われている。（信仰そのものは，それ以前からあった。）一つは，ブータン中央部のトンサにある古い寺であるドゥラサ・ラカンと見張り塔に接続して建てられ，あとの二つは王宮内にあって非公開だという。

3．レプチャ文化の今後

イランの民族叙事詩『シャー・ナーメ（王書）』の英雄達が，パフレヴィー王朝の崩壊直前に俄にもてはやされるようになり，王妃自ら陣頭に立って民族文化と伝承の保護育成にのり出した時期があった。また，「ラーマーヤナ」や「マハーバーラタ」の英雄達が，タイやインドネシア等で今日なお，信仰と芸能の両面において欠かせない要素となっているのも，もとをただせば，そこには大きく国家の力が介在していた。

ところが，レプチャ族がレプチャ族だけの共同体を失ってから，既に時久しい。先に述べたように，レプチャ固有の神や英雄を含む世界観なり歴史観だけを，今正確に取り出すことは，不可能である。シッキム成立以降のレプチャ文化は，チベットやシッキム王国といった半ば異質な，そして強力な文化体系との同化と異化を微妙に織りまぜながら，今日に至っていると言えよう。本稿ではあまり扱わなかったが，ストックのそれを始めとする幾つかの文献に記されたレプチャの多様な神々の体系が，具体的にどのような形で残されているかは，今後の調査の最大の課題である。残るべくして残る，言いかえれば，何等かの強力な背景があって，初めて後にまで継承され，信仰や芸能の諸現象となって存在しうると考えられる。

レプチャ文化の融合と生き残りの相克は，新たなエスノ化やエスノセントリズムの運動と呼応して，今後も続いてゆくであろう。そして，ストック女史が半世紀以上前にレプチャの人々に語らせた様々

なレヴェルでのレプチャの神々のパンテオンが，その好し悪しは別として，俄に輝きを取り戻す時が来ないとも限らないのである。

注

(1) ストックの注釈によれば，*Lepcha* ではなく *Lapcha* が現地の発音であり，これはネパール語のパールバティヤ方言からきている。"lap" は speech を，"cha" は unintelligible を意味する。従って，"Lapcha" は「意味のわからないことを喋る人々」という蔑みの表現である。自称である "Rongpa" は，しばしば「険しい所に住む者」を意味し，他方 "Mongpa" すなわち「低い所に住む者」という意味の言葉を用いる場合もある［Stocks　1975：4］。

(2) シーガーが1949年の10月から3カ月間行ったレプチャの調査において，彼は種々の文献等を収集し，それを報告している。その中に，レプチャ文字で書き留められ，英語の逐語訳と注釈を付けた，儀礼と祈禱に関する資料がある。（詳細，後述）また，同じくレプチャ文字による，チベット語文献の写本も収集され，13種類ほど紹介されている［Siiger 1956：46―7］。

(3) モリスは登山家であり，ヒマラヤ地域に関してはゴレルよりも先輩である。彼が若き人類学者であるゴレルに出会ったのは1934年で，以後2人は同じ道をあゆむようになり，シッキムへの入国も彼が導いたようだ［Morris　1938：9―12］。

(4) ブンティン *bonthing* を「レプチャ語辞典」で調べると，"*bon*" は「口」，"*thing*" は「首長，主人」を意味する。参考［Waddell　1899：48］。

(5) 「よもぎ」は，"a tree-the fruit of which he could place on a stick and burn slowly like a lamp" の訳。「よもぎ」とは確定できないが，実を火種にする点，薬用にする点，［Gorer　1984：228］に「にがよもぎ wormwood」という植物が儀礼に必要な物として出てくることなどから，このように訳した。

(6) レプチャ族は，彼等の住居，生活道具，楽器，その他の部分で竹と極めて深い関わりをもっている。参考［Waddell 1989：48］。

(7) ブンティンとムンの違いは，相当込み入っているため，正確には扱い切れないと言えよう。ムンには女でもなれるという点，および，ムンはブンティンと違って，口琴や笛の伴奏で歌うことができるという点等が明瞭な相違と考えられる。ムンの歌に関しては［Waddell　1989：48―9］を参照。ゴレルの表現では，「ムンは特に，収穫・狩猟に関する殆どの儀礼と，いくつかの魔よけの儀礼に卓越している」［Gorer　1984：187］。因みに，「レプチャ語辞典」では，"*mun*" は「音（符），歌唱，聖職者，吟遊詩人，等」とある。

(8) ゴレルは主としてムンを扱い，あまりブンティンには言及していない。この場合，両者の違いにあまりこだわらなくとも良いと考えられる。

(9) 先の注2に示した，レプチャ文字で書かれた儀礼と祈禱の種類として，次のようなものがあげられている。

＊家族に関した儀礼――カンチェン，家神（*lirum*），太陽神，*lyang rum*，*pa dim* のための儀礼。

＊農業に関した儀礼――米の豊作を祈るもの（ここに，「米のお祖母さん」という言葉が登場する），邪神を退けるためのいくつかの耕作に関わる儀礼。

＊家蓄の増加を祈る儀礼。

＊猟に行く前の猟師の儀礼。

＊職業に関する儀礼――家を建てる時の大工の儀礼，鍛冶屋の毎年の儀礼・引退して息子に引き渡す時の儀礼・その息子が父親から仕事を受け継ぐ時の儀礼。

＊人生の儀礼――誕生の時，結婚の時等の，いくつかの長い儀礼。

＊時々に行われる儀礼――病気や事故の時の儀礼，今は行なっていないが，戦争に関わる儀礼として，戦士が家を離れる時・彼が留守の時・帰宅した時，の儀礼。

＊大祭として――新年の祭，カンチェンのための *cherim* の儀礼，特に北ジョングにおけるカンチェンの儀礼。

＊ブンティンやムンが，聖職者としてそれぞれが行う儀礼［Siiger　1956：46］。

(10) ［Nebesky　1975：212―3］には，チベットの聖山の祭り方，祭壇の設定の仕方等が記されているが，その具象的なとらえかたは，レプチャ（シッキム）におけるカンチェンジュンガの場合と極めて類似している。

(11) カンチェンジュンガを扱おうとする者は，何等かの形でその語義に必ず触れているが，専らそれだけに取りくんだ

論文がある。マーネンは，その語源を，サンスクリット，チベット，ヒンディ，その他に求めて，それぞれを論じた結果，やはりチベット系に落着いたようである。尚，この語義の混乱を助長したのが，英語文献における音写の不統一にあったことは，何やら象徴的である。[Manen 1932] なお，「カンチェンジュンガ」の片カナ表記は，『ヒマラヤ小事典』に準じた。

(12) 五宝の内容については，必ずしも一定していない。モリスは，金・銀・玉・穀物・教典 [Morris 1938：274]，マーネンは，塩・金とトルコ石・教典と富・武器・農産物と薬 [Manen 1932：199]，筆者の，現地での聞取り調査によれば，塩・薬・鉱物・教典・穀物や食糧，であった。シッキム政府刊行物では，上記の「薬」の代りに，「武器」となっている [Sharma 1983：13]。

(13) レプチャの歌と踊りに，「カークーク－ *Ka koo koo*」という曲がある。鳥の鳴く声で農作業の時期を知った時代を背景にした，明るいものである。踊りの振りの中に，苗を植える動作が入る。

(14) 五つの宝を保持し，その一つに教典を含むのであるから，カンチェンジュンガは宗教の保護者ということになる。注の12を参照。

(15) ヒンドゥー美術の世界で論じられているように，このあたりで見かけることのないライオンは，"Kingly power dominating the four quarters" を表す紋章的な意味を持つと考えることができよう。参考 [Zimer 1983：256]。

(16) 筆者は1986年のブータンでの科研の調査の折に，調査のインフォーマントを勤めたある還俗僧から，ケサルの祭壇用の長さ15cm位のデュオを一組もらった。その4本（4体と言うべきか）のそれぞれの意味は次の通りである。ケサルの館，后，右腕（＝ケサルの命令を実行する者），軍隊の大将。彼の説明では，デュオは，神などを具現したもの body である。

(17) チベットでは大体において，右手に鞭，左手に槍，弓矢を背に左馬に跨った姿で表現されている。因みに，ケサルを描いたチベット製と思われる（筆者はネパールで購入したが）絵葉書の裏には，次のような説明があった。

In olden times the compassion God-Avaloketesvara manifested himself as King Ge-Sar so that the Forces of darkness that existed in Tibet before Buddhist religion reached there could be conquired. King Ge—Sar was a mighty King. Demma, one of the eighty famous Ge—Sar soldiers, had great Tantric Powers. Ling Dynasty ruled over Tibet in the 7th century A.D. All enemies who hold wrong views are destroyed by the magic of Demma. May God Give Light to the entire world.

また，ブータン中央部トンサにあるケサルラカン（ケサル寺院）の祭壇には，ケサルのコピー的な馬に跨った小さな将軍人形が14・5体配置してあった。

引 用 文 献

青木保 1987 「文化の否定性――反相対主義時代に見る」『中央公論』11月号（1227号），pp. 104—125。

DAVID-NEEL A. & YONGDEN

1978(1934) *The Superhuman Life of Ling* (the English Translation of the 1931 of Paris), NewYork.

FRANCKE, A. H.

1909(1905, 06, 07) "A Lower Ladakhi version of Kesar Saga" *Bibliotheca Indica* (new series), No. 1218 (1134, 1150, 1164), Calcutta.

GORER, Geoffrey

1984(1937) *The Lepcha of Sikkim,* Cultural Publishing House, Delhi.

HERMANNS, Fr. Matthias

1954(1951) *The Indo-Tibetans.* K. L. Fernandes, Bombay, HRAF Files, AK5.

金子英一

1987 「ケサル叙事詩」『チベットの言語と文化』（長野泰彦・立川武蔵編）冬樹社，pp. 408—427。

君島久子

1987 『ケサル大王物語』筑摩書房。

KOTTURAN, George

1983(1976) *Folk Tales of Sikkim,* Sterling Publishers, New Delh.

LORIMER, D. L. R.

1935(1931) "The Adventure of Kiser" *The Burshaski Language,* Vol.II, Text & Translation, Oslo.

MANEN, J. van

1932 "The Origin of 'Kangchenjunga', *Himalayan Journal* IV, pp. 198—214.

MORRIS, John

1938(1937) *Living with Lepchas,* London. HRAF Files, AK 5.

中根千枝

1958 「Sikkim における複合社会」『季刊民族学研究』第22巻第1・2号, pp. 15—64。

中村雄二郎

1983 「魔女ランダ考」『魔女ランダ考』岩波書店, pp, 7—78。

NEBESKY-WOJKOWITZ, Rene de

1975(1956) *Oracles and Demons of Tibet,* Akademische Druck-u. Verlagsanstalt, Austria.

SHARMA, Ramesh

1983 *Images of Sikkim, The Land, People and Culture,* Pub. by Rigsum Productions, Sponsored by Department of Tourism, Government of Sikkim, India.

SIIGER, Halfdan

1956 *Ethnological Field-Research in Chitral. Sikkim, and Assam,* Koberhavn.

1978 The "Abominable Snowman" : Himalayan Religion and Folklore from the Lephcas of Sikkim", *Himalayan Anthropology (ed.* by James F. Fishemr), The Hague.

STOCKS, C. De Beauvoir

1975(1925) *Sikkim, Customs and Folklore,* Cosmo Publications, Delhi.

スタン R. A. (山口瑞鳳他 訳)

1971 『チベットの文化』岩波書店。

鈴木道子

1982 「フンザの口承文芸」『東西音楽交流学術調査報告II』(国立民族学博物館 藤井知昭編・刊), pp. 25—54。

1987 「儀礼詞章とその行為遂行的発言機能——北設楽神楽次第"よなぶねをこぐ"等をめぐって——」『聖徳学園岐阜教育大学紀要』第14集, pp. 57—78。

TUCCI, Giuseppe

1980(1970) *The Religions of Tibet,* tr. by G. Samuel from German and Italian, Allied Publishers Private Ltd., New Delhi.

WADDELL, L. A.

1899 "The 'Lepchas' or 'Rongs' and their songs" *Internationales Archiv Fur Ethnographie Herausgegeben* (ed. by J.D.E. Schmeltz, Band XII, London. HRAF Files, AK 5.

1958(1894) "Lamaism in Sikkim" *The Gazetteer of Sikkim,* B.R. Publishing Corp. Delhi, pp. 241—395.

1978(1899) *Among the Himalayas* Ratna Pustak Bhandar, Nepal.

ZEITLIN, Ida

1978(1927) *Gessar-Khan : The Legend of Tibet,* Asian Publishers, India.

ZIMMER, Heinrich

1983(1955) *The Art of Indian Asia,* completed and ed. by Joseph Campbell (in two volumes), Princeton UP.

レファレンス

『文化人類学事典』弘文堂, 1986年。

『ヒマラヤ小事典』朝日新聞社, 1977年。

Dictionary of the Lepcha Language, compiled by G.B. Mainwaring, revised and completed by Albert Grunwedel, Ratna Pustak Bhandar. Kathmandu, 1978 (1898). (本文中は「レプチャ語辞典」)

The Gazetteer of Sikkim, (ed.) with an Introduction by H.H. Risley. B.R. Publishing Corp., Delhi, 1984 (1894).